

昆曲『夕鶴』と女優・洪雪飛

一 洪雪飛と『夕鶴』の出会い

一九六〇年九月の中国の北京首都劇場で、木下順二の『夕鶴』が上演された。この舞台を、当時十代後半の昆曲の若い女優・洪雪飛が見て感動し、密かに自分で「つう」を演じたいと決意していた。

洪雪飛は、その後、文化大革命時代に模範劇の一つ現代京劇『沙家浜』の主演・阿慶嫂を演じて評判になり、全中国に知られる名女優になった。文革終了後、彼女は京劇から元の昆曲に戻り、北京市の北方昆曲劇院に所属して「梅花獎」という中国演劇の最優秀賞をいち早く受賞し、北方昆曲劇院を代表するばかりか、昆曲劇界のトップスターに成長していった。

一九八五年三月に、日本演劇学会のグループで中国演劇を観る旅行団が組まれたが、それに参加した私は、北京で北方昆曲劇院の稽

向井芳樹

古中の『長生殿』を観た。その時、楊貴妃を演じていたのが洪雪飛であった。始めて観た古典劇・昆曲の普段着の楊貴妃に感動した私は、ファンレターのような手紙を書き、その後も一方的に連絡を続けていたが、訪中の度毎に舞台を観て、彼女との交流を継続していた。

一九九三年八月、北京到着の日、私は北京の老舎茶館に京劇の歌唱で出演中の彼女に偶然出会った。間もなく私の宿舎を尋ねてくれた洪雪飛は、この三十年余りの『夕鶴』への思いを私に打ち明け、『夕鶴』を自分の北方昆曲劇院で上演したいと言いつつ出出した。

後で、どうして私に対して、そんな話を始めたのかを聞いたことがあったが、一九九一年の武漢・漢劇の若者達と『曾根崎殉情』（『曾根崎心中』を中国古典劇の様式で上演したもの）を、私が創っていたことと、永く交流が継続していたことが、その理由であった

ことが判った。

中国古典劇でも最も古く伝統的で、保守的な「昆曲」で、初めて外国である日本の、しかも新劇の脚本を素材にした新作を創りたいという願いは、唐突で冒険だと思われた。

相談を受けた私は、原作者である木下順二先生の許可が得られるかどうか也容易なことではないし、彼女の所属する劇団の責任者である院長や上部団体の北京市文化局の幹部が賛成するかどうかも問題であったから、簡単にできるとは思えなかった。しかし、彼女の熱意は、最終的にはこの全ての困難を克服したのである。

二 『夕鶴』上演の許可が出るまで

私が木下順二先生に許可を願った書簡が、ワープロの記録に残っていたので、必要な部分を掲げたい。

秋も深まり、満月の夜が近づいております。先生にはお変わりございませんか。

長らく御無汰沙致しております。突然の中国からのお願いで、失礼致します。

小生は、同志社大学の許しを得て、本年九月より一年間の予定で、在外研究で中国北京に来ております。九一年の暮れには北京で、中国の地方古典劇の一つである、武漢の漢劇の若者達と私が協力して

製作した『曾根崎殉情』（日本では八八年に兵庫県尼崎市で上演しました）の公演があり、その時の北京の座談会の発言が縁で、中国戯曲学院が講義を依頼して来ました。在外研究をそれに併せて、中国戯曲学院に籍を置いて、既に観劇三昧の一月を過ごして来ました。

さて、八五年に中国を訪問したときに、偶然の機会で、中国古典劇の一つである昆曲の女優に会いました。その当時、中国全土の昆曲を沢山見て来られた尾崎さんが、北方昆曲の優れた女優の一人として、雑誌「悲劇・喜劇」に紹介しておられる、洪雪飛さんです。

私はその後も彼女と文通を続け、八七年に北京で再会して以来、さらに交流を深めておりましたが、今回の来京の初日に、老舎茶館に出演していた彼女に偶然出会い、彼女は今回の一年間の私の滞在を知り、すぐに中国戯曲学院の宿舍をたずねてくれました。

日本の演劇の話の折に、彼女が特別の思いを込めて、『夕鶴』の公演を見て感動した話を始めました。日本の演劇を見て、国境を越えた感激をしたのはその時が初めてで、今でも興奮するほどであると語りました。さらに、彼女は自分の昆曲で、『夕鶴』を上演してみたいという思いを、その時から抱き続けていたと、目を輝かせて語りました。

私も、先生の『夕鶴』には、特別の感慨があり、自分の書いた論文の中でも、『夕鶴』論には自信もあって、年来の課題の作品でし

たから、それは可能だから、早速、木下先生にお願いの手紙を書いて、許可をいただこうと返事しました。

ご存じの通り、中国はまだ版權や上演権の考えがありませんが、彼女は作者の木下先生に許可をいただいてから、始めたいと、最初の時から考えていたようで、先生に面識のないことと、一度の観劇体験だけの資料不足から躊躇していたようでした。私が先生に願いますと申しますと、大変喜んでおります。

先生が山本安英先生以外に、上演の御許可をお出しになれないことは、よく承知いたしておりますが、能楽や歌劇には御許可になられた例もあり、中日文化交流のためにも、お許しただければ、大変うれしいことでございます。

昆曲は五百年の歴史があり、京劇に比べて伝統が古いばかりか、その詞章も古典漢文ですし、なによりも彼らが強調するのは、人物の心理の分析や詞章の解釈が徹底して、歌唱力にも優れ、中国で一番に興行きの深い優雅な演劇であるということです。歌舞伎に対する能楽に相当するものと考えているようです。

全体は新劇の形式にせず、昆曲の中国古典劇の様式に改め、昆曲の演目として上演したい。舞踊の要素を加味して、鶴の舞を初めと終わりに入れたいとか、歌うのは「つう」だけにして、「与ひよう」は二枚目役の小生にすると、都会の若者になるので、農村の青年を

演じられる老生にやらせたいとか、「運ず」と「惣ど」は道化役の丑角と敵役の要素のある花臉にやらせたいとか、すでに彼女の頭の中には、イメージがふくれあがっているようです。全部、私としても賛成です。

国境を越えた演劇の可能性を探ることになりそうです。先生の「夕鶴」はそのままで、優れた戯曲として国境を越えたものですが、中国の多くの人達にまでその魅力を知ってもらえる機会になればと思っています。もしご許可がいただければ、山本安英先生やそのお仲間のお力をお借りしなければならなくなると考えています。

さて、洪雪飛が北京図書館で「夕鶴」の翻訳の数を確認し、家庭でも自分が「つう」をやりたいと家族に話したら、娘が「すぐに減量を始めなさい」といったとか、中国の人達に「夕鶴」がいかに浸透しているかが分かりました。ちなみに彼女は決して太っている方ではありません。「長生殿」の楊貴妃が得意の、気品の高い芸風の女優ですが、楊貴妃のように太っていませんし、大変品格のある女優さんです。

彼女は文革中に、模範教育劇のひとつの主役・阿慶嫂を演じて、現在でもそれで知られている程の全中国的に著名な女優です。これは農村の若い女性で、解放軍のために協力する肝の座ったたくましい女として活躍するもので、その唄はいまも多くの人達に唄われ、

茶館でのアンコールにも、これがリクエストされ、力強い歌唱が始まるとそれだけで、拍手が起こるほどでした。

かつて、先生から頂戴した歌劇「夕鶴」のレコードも、十月に家内の来京の折に持参させて、彼女に聞いてもらうつもりでおります。戯曲の上演が不可能なら、せめて、「つう」の気持ちを唄う歌曲をつくりたいと考えています。

近松門左衛門の「曾根崎心中」を中国人の人達と協力して、漢劇「曾根崎殉情」を作ったからは、創作のおもしろさ・魅力に取り憑かれたようで、バレエの「曾根崎心中・道行」や「雨月物語・浅茅が宿」（待つ女）や、井原西鶴に取材した「雲井太夫心中」や中国京劇俳優と合同で演じた舞踊劇「七夕幻想」など、この五年ほどの間に、自分の教え子がプロの音楽家・バレリーナ・舞踊家に成長したので、彼らを相手に、関西でささやかな仕事を続けて来たので、今回の洪雪飛との創作活動も、私にとっては、待望の木下先生の作品にからんでの仕事なので、大変意欲を燃やしています。

中国戯曲学院は、中国唯一の古典劇の大学です。新劇の大学はいくつかありますが、京劇を中心にした大学で、優秀な学生が全中国から集まっていますが、ここ数年、中国の経済政策の大きな変化に、古典劇が取り残されそうで、観客の動員力が極度に落ちて、全員が大変な危機感を抱いています。彼らに、中日古典劇の比較を講義し

ますが、彼らをいかに落胆させないように、がんばらせるかが、大きな課題です。理屈でなく、どんな改革が現状を打開できるものとなるか、創作を含めて、一年がかりで考えるつもりです。

勝手なお願いでございますが、よろしくお願い致します。

健康！（お体をお大切に）

オリンピックの北京開催が駄目になって、北京中ががっかりした日です。昨晩は判明する真夜中の二時まで、ほとんどの北京人はテレビの前にいたようで、駄目だと判明した瞬間には、爆竹が、学校の周辺（北京の南の方で、いわゆる下町です）で数分鳴り響きました。事前からの覚悟もあつたらしく、前日にどちらに決まっても騒がないようにという伝達が、各職場に徹底していたようです。当日の子供番組でも、次ぎは二〇〇四年があるからと、アナウンサーに言わせていたほどで、それまでの五輪歓迎の数種類の歌や踊りが繰り返されていたのが、気の毒になりました。

（一九九三年九月二十四日）

その後、しばらく木下先生からのご返事はなかったが、偶然、十二月二十一日、北京のホテルで山本安英先生が逝去された新聞を観た。ご返事をいただけないのは、山本安英先生のご病気が原因だと思われたので、すぐに山本安英先生のご逝去を悼む手紙を書いた。そして、「夕鶴」がもう日本では見られないことを悲しみ、中国で蘇が

えらせないという願いの手紙を再度書いた。

一カ月後の十二月六日、木下先生から、ご許可の便りが届いた。特別に上演の許可を出すのが、中国の新劇の友人である北京人民劇場の演出家・夏淳先生に相談し、演出を引き受けてもらうことが上演の条件であると書かれていた。

そして、企画の開始から一年後の一九九四年八月、北京市の中心部にある北京兒童劇場で夏淳演出の昆曲『夕鶴』の舞台は幕を上げ、昆曲『夕鶴』の中国の鶴は、北京の空を飛んだ。

三 洪雪飛 追悼

しかし、同年九月十三日、新疆ウイグル地区の慰問公演の途中、不慮の自動車事故で、洪雪飛は突然帰らぬ人になった。一週間後の二十日には、日本大使館主催の昆曲『夕鶴』の公演が予定されていた。彼女が希望していた日本公演も不可能になってしまった。

洪雪飛による中国の昆曲『夕鶴』は、「鶴」は、もう永久に日本には飛んで来れない事になってしまった。

その葬儀に対して、私は、日本から、次の弔辞を贈った。

《洪雪飛女士に捧げる言葉》

私は信じられない。

私は信じることができない。

昆曲『夕鶴』と女優・洪雪飛

私はどうして信じられようか、信じられない。

私の「阿慈・つう」よ。「您飛向何方！」あなたはどこへ飛んで行くのか！

私が「您飛向何方！」と『夕鶴』の結びの詩句を書いた時には、鶴はどこへ飛んで行っても、何度でも何度でも帰って来て、私達の『夕鶴』が中国の人民に親しまれ、昆曲の代表作になることを、そして、やがては東京にも飛んで来ることを、信じていた。

私の惜別の宴の時、あなたは私のために「一行仙鶴上青天」の詩句を書いてくれた。

あなたは、私に大空を越えて、日本に飛んで来ることを約束してくれたのではないのか。

私はそう信じていた。

人民のための芸術・演劇を、常に心掛けていた、あなたは自分が心身とに疲れている時でさえも、中国各地の仲間のために、自らの芸術である歌唱を聞かせ、彼らを慰問することを、自分の責務と考えていた。今度は、石油労働者の同志達の慰問のために出掛けたのだと聞いた。

それが帰って来ない飛翔に終わるとは。私は信じられない。

信じられない私には、まだ、あなたを悼む文章は書けない。

あなたの、そして私達の『夕鶴』が、不死鳥のように甦って、あ

あなたの願っていた日本の空を飛翔するようになる時まで、私はあなたに別れを告げることはできない。

あなたと私達の昆曲『夕鶴』が、あなたの願いのように日本の空に飛んで来るまで、私は出来る限りの努力を重ねたい。

私が今、書き始めている、あなたとの出会いから、不思議な縁によって私達が昆曲『夕鶴』の創作を始めたいきさつや、沢山の先輩や仲間を支えられながら完成・上演にまで至った経緯を書き綴っている文章が、完成したとき、私はあなたの挽歌を、歌うことができようになるかもしれない。

何方かへ飛向しないで、私達の青空の上を飛翔し続けていてほしい。私達があなたの願いを適えられるようになる時まで。

私はあなたがいつまでも私達を見守っていることを信じている。

一九九四年 十月 九日 東海扶桑之国

この追悼文は、中国語に翻訳されて、葬儀の式場に掲示された。後に「北京晩報」という夕刊紙にも採録された。

この時の約束を果たすために、九五年の春、日本演劇学会で「昆曲『夕鶴』と女優洪雪飛」と題して発表した。その時の原稿がこの文章の根幹となっている。

三 昆曲『夕鶴』と中国

一九九四年八月始めに、昆曲『夕鶴』は、北方昆曲劇院（北昆）によって北京市兒童劇場で初めて上演された。洪雪飛（阿慈）主演の舞台は、そのときの三度の公演で終わってしまった。

翌年、一九九五年九月には、北京国際婦人節参加公演として、楊鳳一（阿慈）主演で再演され、同年十月には、同じく楊鳳一主演で、中国文化局主催の中国古典劇創作コンクール（成都市）に参加し、数多くの受賞の栄誉に輝いた。

『夕鶴』の中国での上演の試みは、すでにその二年も前の一九九一年に、南京市にある通称の南昆（江蘇省昆劇院）で計画が立てられ、原作者である木下先生の許可を得て、脚本が完成していた。経費の都合や主演女優・張継青（つう役）の躊躇が理由で、中絶したままになっていたらしいことが、途中で判明した。すぐに調査を始め、先方の状況を確認して、了解を得、南昆とは競合する事もなく北方昆曲劇院が一年がかりで創作を始めた。

後に南昆所屬の演出家が、自分の劇団の許可を得て、北京の『夕鶴』上演に副演出家として参加してくれたのだから、問題はなかった。

このときのいきさつを、後に木下順二先生に報告した文章がある

ので、ここに掲げたい。

数年以前に、南方昆曲で『夕鶴』を上演しようとして、脚本が作られ、演出計画などがたてられました。

脚本が木下先生のお手元にあるのが、それです。しかし、それは上演に至りませんでした。理由は、製作費の用意ができなかった事が第一です。主演を予定されていた南方昆曲劇院の張継青さんが、脚本を読んで、自分には自信がないのから、若手にテストでやらせて、その経過を見て判断したいと、態度を保留されたので、若手を探したが引き受ける人が無くて、結局中止に終わったというのが第二の理由です。作者や演出家は不満を今でももっているようで、機会があれば現在でも上演したいと考えているようです。

北方昆曲の『夕鶴』が成功すれば、南方昆曲の方も再度上演に踏み切るかも知れません。ただし、演出を引き受けていた呉継静さんが、北方昆曲の『夕鶴』の副演出をされたので、南方昆曲の『夕鶴』が少し変わるかも知れません。

北方昆曲の『夕鶴』の脚本が完成するまでは、夏淳先生の指示もあって、北方昆曲の人達は、南方昆曲の『夕鶴』の脚本は見えないようにしていました。いまは副演出の呉さんもこちらに来て、一緒に北方昆曲の『夕鶴』を作っていますから、南方昆曲の脚本の話も出ますが、現在のものは三時間を越える長編の劇であることや、おつ

うの妹分の鶴が一緒に人間になって、相談しながら進退を決めるとか（『白蛇伝』の設定にとらわれているようです）、最後の別れでもうこれ以上布を織ると死ぬから鶴に戻るのだという理由づけがされていたとか、昆曲独特の修辭で故事成語が多量に含まれていたとかが、南方昆曲の『夕鶴』の特徴だということが分かりました。これだと、事前に読んでいても、影響を受けるはずはありません。基本的な考え方が違っていましたから。

三十年以前の『夕鶴』の北京での舞台は、その後の完成されて行く『夕鶴』の舞台とは違っていたはずですが、わたしが話す完成された『夕鶴』の舞台を、洪雪飛さんや夏淳先生は、自分の見たものと同じものだと信じています。完成度を高めていったそれから数十年の『夕鶴』の舞台を、すでに彼らは脳裏に自ら育てていたことになりす。ですから、原則的には話劇（新劇）『夕鶴』を、北方昆曲で再現したいと言うのが、中国の人達の願いでありました。

南方昆曲のは、原作離れが著しいようですが、北方昆曲はあくまで原作の世界を尊重してと考えています。

しかし、能楽の『夕鶴』よりは、北方昆曲の『夕鶴』は原作離れをしています。

昆曲が能楽よりも、歌舞劇の要素を強くしていますので、古典劇の音楽（歌唱）と舞踏ではありませんが、ミュージカルの感じがしま

す。話劇の部分と歌唱や舞踏の部分が流動的に連続していて、違和感はありません。俳優達は大変自然に二つの部分をつなぎ合わせています。「子午線の祀り」とは違った古典劇の魅力があると思います。開幕の時に山本安英さんの朗読されたイメージを借りて、「夕鶴」でも女性の読み手が歌で内容の説明に相当するものを、舞台に登場する四人の楽士（笛・三味線・胡弓・笙）の音楽伴奏に合わせ、歌うという趣向として取っています。これは北方昆曲劇院の過去の作品にも行ったことのある演出で、私の提案が珍しく直ぐに取り上げられた例です。

夏淳先生や他の演出家達や作者（北方昆曲）までが、歌唱の部分楽譜によって指示したり、自分で歌ったりするのが、驚きでした。始めは笛だけの伴奏（これが昆曲の音楽的な特徴）でしたが、一日に一場毎（全六場）の本読みの一週間の稽古で、だれも台本を持たなくなり（夏演出家と作者だけは、改訂・変更を記録するために持っている）せりふの間違いはお互いが訂正するだけで、進行して行くのも驚きでした。

この文章は、最初は九四年の六月ごろに書き始めて中絶していたものです。九六年にそのいきさつを書き加えたものである。

四 昆曲「夕鶴」と昆劇「夕鶴」

一九九四年の六月になって、東京都民劇場が九六年の五十周年の記念興行として北方昆曲劇院のやっている「夕鶴」をその候補作に選び、下見をしたという申し入れが、洪雪飛の所に届いた。私達は、自分達が創っている作品には自信があったから、突然の申し出に歓喜した。願ってはいたが、いつ果たせるかは、疑問であったことが、実現性をもったのだから、もう日本行きは決まったように勘違いしていた。

八月の初演を見に来てくれた、東京都民劇場の代表者達は、舞台の出来栄えには大変不満であったらしい。日本公演にも躊躇がみられた。その時に、洪雪飛の事故があり、洪雪飛の「夕鶴」という条件が崩れたこともあり、その後の北方昆曲劇院側の対応にも勘違いからの遅れがあり、日本公演計画は白紙に戻った。

一九九六年五月には、上海昆劇團（上昆）は、都民劇場主催で、梁谷音（碧玉）主演により昆劇「夕鶴」の東京上演を行った。これは都民劇場と上昆の独自の企画で、北方昆曲劇院の昆曲「夕鶴」とは関係がない。

その後、この公演を巡って、北方昆曲劇院の昆曲「夕鶴」の扱いが、日本側で問題になり、原作者の木下先生が不愉快な思いをして

おられることが、私に伝えられた。その時に木下先生宛に出した書簡をつぎに掲げたい。

阪神淡路大震災のお見舞いを頂戴しながら、ご返事を差し上げることを大変に遅延致してしまいましたところ、昨日、摂南大学の瀬戸さんより、先生がすぐに連絡が欲しいとおっしゃっておられることを聞きました。

失礼を重ねていた無礼をおわび致します。お許しください。

さて、昨年（一九九四）の九月に、帰国してすぐに上京したおりに、お電話をさせていただきましたが、ご多用中でお目にかかることができませんでした。周りの状況から、訳があつて拒否されたのではないかと、判断してその後のお便りを控えておりましたが、間もなく、ご承知の通り洪雪飛さんが不慮の事故で亡くなりました。

思いがけないことで、長らく呆然自失の状態が続いておりましたが、東京都民劇場の方から、洪雪飛の死去に伴い、北方昆曲劇院が連絡をして来ないので、都民劇場による東京公演を白紙撤回すると連絡を受けました。

その内、木下先生が、北方昆曲劇院が上演したのに、正式に著作権に関して何の連絡もして来ない失礼に大変お怒りであるという話ですが、私の方にまで伝わって参りました。

私は夏淳先生の演出を条件に先生が洪雪飛主演の北方昆曲劇院に

よる、昆曲『夕鶴』上演のご許可をいただいた後は、劇団の問題だと考えて、九四年春から北方昆曲劇院の院長に、正式に上演許可を求める著作権に関する契約をするように、通訳を介して何度も申し入れをしておきましたが、それに対する返事がなく、そのまま上演の雑事に紛れて放置していたことが、問題になっていることがわかりましたので、すぐに新しい阿慈による再演を目指し都民劇場に招聘を依頼するのなら、即座の反応と原作者への許可願いを提出するように、通訳を介して連絡しました。

その後、都民劇場も北方昆曲劇院も、私とは関係なしに直接の交渉を行い、採め事があつたり、新しい上海の『夕鶴』が決定したりしました。私が無視されたことは、私自身当然の事だと思つておりましたから、問題はないのですが、断片的に聞こえてくる噂の中に、木下先生が、大変に憤慨しておられるので言うような理由がはいつてきたので、ますます、直接先生に報告をすることが躊躇されるようになってしまいました。

特に、再演までに、夏淳先生ご夫妻が『茶館』の演出で来日され（一九九五年五月）、東京で木下先生にもお会いになると聞いて、その後その結果にしたがつてご報告をと勝手に考えたりしていましたが、その様子がいつまでも伝わって来ないし、中国側の対応が分からないので、八月に再演をするらしいので、そのときに北京へ見

に行つて、詳細が判明してからとご報告するのを遅らせておりました。

地震につきましては、幸い家屋の倒壊は免れ、被害地の中では、家財の損傷程度の軽いもので、ご放心いただけるようなものでございましたが、書斎はいまだに地震当時のままの状態が半分ぐらい残っておりまして、フロップイもかなりの損傷を受けていて、夕鶴関係の資料も持ち帰つたものを、全部はまだ探しあぐねているような状態です。

北京での北方昆曲劇院の昆曲「夕鶴」は、原作離れが著しく、向井が勝手な改編をしたので、日本に呼ぶことができないのだといつた、日本の専門家の評価が聞こえて来て、先生に私が直接申し上げますことが、言い訳になつたり、告げ口になるような気がして、まずご報告が遅れておりました。

いずれは、先生のお許しが出たときに上京して、実情や気持ちを申し上げることができたらと願っております。

今回の新しい「阿慈」役の女優の、九四年度の「梅花獎」をうけた楊鳳一さんは、三十代半ばの美しい女優で、洪雪飛とは違つた阿慈を演じたと、北京の専門家の中では評判も上がりつつあるようですし、合評会の批評を入れた改訂（これには私は関係していません）も好評で、成都で行われる二年ぶりの全中国創作古典劇のコン

クールに北京市の文化局によって選ばれて北京代表として参加が決まり、夏淳先生を中心に取り組んでいるようです。

世界婦人大会に参加公演と称して、北京市文化芸術祭参加の公演が九月の始めにありましたが、婦人大会への連絡が悪くて、婦人代表は見に来てくれませんでしたし、日本のマスコミにも連絡が悪く取材がありませんでした。しかし、中国の中で、「夕鶴」が蘇つたことは確かな手ごたえがありました。

夏淳先生の仲間の演劇関係者が、観劇の当日や翌日、電話や自宅訪問で、「夕鶴」の感動を数時間にわたつて語りかけて来たという事実や、脚本を読みたいという希望が劇団やマスコミにあり、対応に戸惑っていることなど、今までの古典劇・昆曲には見られなかつた反応がありました。日本の都民劇場側が、「話劇でもない、昆曲でもない、ミュージカルでもない」と酷評をしたらしいのですが、信じられない恥ずかしいことです。通訳が悪かつたのかも知れませんが、中国の演劇関係者や観客は、日本の「夕鶴」の観客と同じように作品の内容に感動し、涙を流し、昆曲の新しい夜明けだと称賛しているようです。洪雪飛の時と比較しながら、新しい阿慈の魅力に感銘を受けているようです。

上海の「夕鶴」の話も北京に聞こえて来ましたが、伝聞ですから、作られたものかも知れませんが、上海の方は外国向けに製作してい

るので、北京のと競い合う気がないとか、北京では配役が若返ったのに、上海ではベテランでかためすぎて、華やかさがいいのか、子供を一人も登場させないのを、日本側が許容したのは筋がとおらないのではないのかなど、演劇専門のマスコミが書き始めているようです。

通訳を通してあるので、選ばれた情報しか得ていませんが、とりあえずご報告できる範囲を書き連ねました。失礼をお許しください。

(一九九五年九月二十日)

この手紙の後、木下先生よりのご返事があり、ご了解してくださいましたこと他に、北方昆曲劇院の上演する『夕鶴』は、必ず、向井芳樹改編の昆曲『夕鶴』として称して、原作の『夕鶴』と区別するようにとのご指示があった。

本文でもその指示に従って、北方昆曲劇院の昆曲『夕鶴』と、上海の昆劇『夕鶴』と原作の『夕鶴』の区別をしている。

五 夏淳演出の昆曲『夕鶴』

さて、製作時の問題に戻る。

主たる演出家としては、二カ月後に特別の上演許可をくださった、原作者木下順二氏の許可条件として、指定のあった人民芸術劇場に所属しておられた、夏淳先生が引き受けられた。はじめに、この許

可条件を聞いた時には、これは難問題だと困ってしまった。日本の常識では、古典劇の演出を「話劇」の第一人者が引き受けてくれるかどうか、心配であったが、ところが洪雪飛は、この話を聞くなり、大変に喜んだ。既に二年前に『南唐故事』という昆曲の新作古典劇を、夏淳演出でやったことがあり、それに成功しており、夏淳先生との関係はよいのだから、間違いなく引き受けてもらえると言うのであった。

また、北方昆曲劇院の院長も賛成で、一九九四年の北方昆曲劇院の中心演目に『夕鶴』を据え、全面協力を約束した。北京市の文化局もこの新作の計画に賛成し、特別予算をつけてくれた。付随して起こる困難は全部解決したのだ。

夏淳先生は、一九九六年九月に長寿を全うされて逝去された。同年三月に北京を訪問した時の再会が最後の出会いになった。先生のご逝去を伝えた中国の新聞の内、いくつかは晩年のお仕事の代表作として、昆曲『夕鶴』を上げ、その絶え間無い創造力に敬意を表していた。九五年の成都市での古典劇創作劇コンクールで、この昆曲『夕鶴』で最優秀演出賞を受けられた。楊鳳一の主演女優賞とともに北方昆曲劇院の栄誉でもあった。

先生は私に、演劇では脚本が第一なのだから、君と張虹君との改編(脚色)の手柄だと、私達の受賞がなかったことを労わって下さ

った。うれしい思い出であった。

九五年の婦人節参加の公演の後、舞台上に政府高官や批評家達を出迎えて、握手の交流があった時に、何人かの人達が、向井はどこにいるのかを確認して、特別に改編がよかったよと言葉をかけて下さった時に、夏淳先生も我が意を得たとばかりに、私にはほほ笑みかけてくださった事を思い出した。

六 昆曲『夕鶴』創作の経緯

九三年、洪雪飛と私と昆曲の作者張虹君に、通訳の康小青の四人で始めた『夕鶴』研究会は、それぞれの希望や条件を出し合って、その年の十二月に四度目の台本がやっと共同製作で完成した。

原作の翻訳や我々の一回目からの原案と四種の台本の全部を検討して、その後で夏淳先生は演出を引き受けるとの返事をされた。

作曲家との相談で、歌唱される歌曲の部分は昆曲の専門の大家・陸放（北方昆曲劇院）が、その他の全体の音楽は若い作曲家・戴頤生（北京曲劇団）に依頼することになり、舞台への道が始まった。

歌曲が作曲されると、昆曲の特徴である伴奏楽器の笛師（王大元）が、俳優と一対一の練習を始め、伴奏音楽がまだ出来て来ないうちから、副演出家・呉継静（江蘇省昆曲劇院）と、張国泰（北方昆曲劇院）の二人が、若手女優六人の鶴の群舞の振り付けを始め、

毎日の稽古が続いた。

主演の夏淳先生が、話劇（新劇）だということで、練習・稽古は、新劇風であり、昆曲の人達には戸惑いが出て、昆曲でなくなるという危惧を抱く人が出るほどであった。演技の流れやテンポを決める司鼓（李永生）の太鼓の音が入らないと、間がつかめないうのである。夏淳先生は始めは、かたくなに、それを拒否されたので、不安が増したが、伴奏音楽が完成して、その許可が出て、古典劇特有の打楽器が自然に加わるようになると、もう昆曲ではないといった不安はだれの口からも出なくなった。

最終的に完成後の感想や批評には、昆曲らしくないとか、昆曲ではないといったものはなかったのだから、夏淳先生は、演出の過程で、わざと新劇風から入るといふやり方をとられたのだということが後に判明した。

七 中国式と日本式

王蘊明・北方昆曲劇院長は、日本の素材を中国の古典劇が脚色するのだから、中国の観客が見て、「日本」がすぐに判ることが必要だという主張をした。

その当時の中国古典劇の日本との交流の実例は、次の通りである。
I 『りゅうおう』（龍王）市川猿之助と李光（中国京劇院と歌

舞伎)は、日本のやりかたに京劇を合わせるもので、両方を混ぜ合わせたもので、中国での公式の上演はなかったようである。

Ⅱ 『曾根崎心中(曾根崎殉情)』 邱玲(武漢漢劇院)が主演。

これは中国古典地方演劇である漢劇の様式を採用し、中国式の上演であった。日本公演もあり、北京を始め、中国各地で上演された。

Ⅲ 『坂本龍馬(坂本龍馬)』 真山美保と李光(中国京劇院と新制作座)による、日本の新劇式の演出で京劇を演じるもので、日本側の要求によるらしい。舞台衣装をつけた彩排(舞台稽古)は行われたが、公式の公演は、出演者の突然の死去があり、日本でも中国でも行われなかったと聞いている。

以上の試みに対して、王院長は日本的な物を取り入れるが、話劇と昆曲の両方の様式で演じる事にし、日本式とか中国式とかに片寄らない事を主張された。

夏淳先生は原作のイメージを尊重しようとされた。

私は最初は、『曾根崎殉情』の成功を経験していたので、全部中国風や中国様式でやることを希望したが、これは入れてもらえなかった。

中国の演劇人の考える「日本」的なものとの格闘が始まった。衣裳は中国人が日本を感じるものというになると、私などには、

どうしても中途半端なものに見えてしまう。富士山の背景にしたい、桜の花を飾りたい、日本の盆踊りの振りを採用したい、日本の食事の習慣を再現したいなどが具体的な形になって出てくると、ついクレームをつけたくなる。両方で少しづつ折れ合って、舞台は固まっていた。

私の気持ちとしては、少しではなく全面的に妥協したような感じではあったが、不愉快感はなく、むしろ自分が変わって行ったような感じであった。

盆踊りの差す手引く手は正確なものに直したし、童謡の「シャボン玉」を童唄に採用しようとした作曲者の選択には、原作の佐渡の童唄に戻してもらったりして、日本人が見たときにひどい違和感がないようにと心掛けた。

八 原作『夕鶴』と昆曲『夕鶴』との違い

その違いの部分を簡条書きにまとめると、次のようになる。

一 昆曲の様式に乗せた事による変化。歌と踊りと様式的な演技が基本の昆曲であるから、新劇の舞台とは根本的な違いが生じた。

歌の部分や踊りの部分が当然のように、付加され、歌劇や舞踊劇の要素が強くなり、様式的な演技とともに、写実の新劇の舞台ではなくなった。

二 古典戯曲の約束による変化。古典戯曲はその構成は、発端の場面から舞台上で見せるのを建前とする。冒頭に中国より日本に飛来する鶴の群舞から始める。二人の出会いや恋愛の発端など、原作では、台詞の中で語られる出来事を全部、舞台上で見せるのを原則にする。最後も阿慈が鶴に戻って、空に帰って行く場面を付け加えた。

三 出会いの設定。恋人との出会いの場面は、特に伝統的な昆曲の得意の場面であるから、歌唱と舞踏の振りを工夫する。

四 物による感情表現も伝統劇の作劇法のひとつである。囲炉裏や、実物の千羽織りの上着や、真珠の首飾りや、炊事道具の鍋釜や、銭や財布などが、演出上の重要な役割を果たしている。原作にならぬ鶴の千羽織りや真珠の首飾りは、中国の観客にはすぐに理解されたが、日本の観客にはすこし抵抗があったようである。千羽織りの上着の場合は最初は意外に思ったが、阿慈が何故に与平の為に布を織ったのかは、初めから売ることが、考えていなかったはずであるから、愛する人に着せるためというのが一番必然性があるので、原作で書いていない部分の補充としては意味があったと考えられる。

五 美意識による衣裳・化粧の工夫。阿慈は、各場面毎に衣服を新しく変えたので、鶴の時のを含めると六度の衣裳替えが行われた。

日本風の頭髮や髪飾りも、三度も取り替えた。場面毎の変化が示されて、案外違和感はなく、気にならなかった。

六 新劇の演出と古典劇の様式のずれが生じた。舞台装置や背景は、昆曲では原則的にはなかったのだから、新劇風の新しいものを創作するのに、新劇所属のスタッフの装置原案をうまく再現できなかった。北斎風の赤富士の背景は評判が悪かった。照明の工夫も北昆のスタッフは細かな対応ができなかった。

七 音楽の違い。歌唱部分と全体の音楽が全部新しく作曲された。昆曲らしさと新しさとがうまく調和していた。西洋楽器や発掘された古代楽器（吹奏楽器）など、効果的であった。司鼓による演技の古典劇風のテンポと、歌舞劇の洋舞風の群舞とが調和していた。

八 日本風の演技・表現にこだわった。日本風舞踏の手踊りの振りを一カ所入れたことや、出演者の履物は日本式にこだわったが、阿慈に限っては中国風にし履きっぱなしにした。部屋の内では座ることにこだわったので、稽古の時はひざ当てが必要であった。

九 舞台装置の工夫。全面に特別注文の白い絨毯を敷き詰めた。写実的な雪景色の大道具やスモッグの使用による大空の表現に多くの工夫が見られた。実現はしなかったが、花道の使用計画をたて、日本的な雰囲気を目指した。特別に製作することも検討されたが、

北京児童劇場には下手にすこし出場・退場のための舞台前面の通路があったので、それを使用した。別の劇場ではないままの演出となった。

十 妖怪の考え方の違い。京劇『白蛇伝』には姉妹の白蛇・青蛇がでるが、彼女らは劇中では「妖怪」と呼ばれている。『搜神記』所収の「毛衣女」は、異類婚姻譚で、「鶴仙子」とも言われるもので、日本の昔話「鶴の恩返し」と同じであるが、妖怪譚の扱いを受けている。ただし、恐怖の対象にはなっていない。

九 採用されなかった趣向・演出の例

その他、出上来るまでに、私が要求を出して、採用されなかった例は、次のとおりである。

一 昆曲の伝統的な舞台様式（椅子・机だけの簡略な装置）を採用しなかった。夏淳先生の演出の基本的な方針による。

二 第二稿では、途中で仲間の鶴が、阿慈の様子を心配して見にくる趣向の部分が中国側より示されたが、最終的には採用しなかった。南昆の『夕鶴』では、阿慈が人間に変身するときに、「白蛇伝」のように妹分の鶴と二人で変身して訪れる趣向を採用していただようであった。

三 第二稿で、老肖（惣じ）の阿慈に対する弓矢の猟の行為に対し

て、鶴達の群れが復讐する場面を用意しようとしたが、これも採用しなかった。

四 子供達の童唄に、最初は「シャボン玉」を使用しようとしたが、これには反対の意見が通って不採用になった。原作の佐渡島の童唄になった。

五 鶴の千羽織りを最初は「天皇」に献上すると言いついていたが、対象を高官に改めて日本の民話の世界に合わせた。

六 老肖が自分の工夫で、日本軍隊式の直立不動の挨拶をしたが、農民のそれに改めてもらった。

七 最後の幕切れは、仲間の鶴が迎えに来て、阿慈と一緒に飛んで行く原案は初演の時は夏淳演出では採用されなかったが、再演時には演出の変更で採用された。

十 原作『夕鶴』と一致していたもの

原作の方法や部分に共通するものと考えていたものは、次の通りである。

- 一 主人公の名前「つう」は、中国でも同じ発音の「阿慈」とした。
- 二 子供と与平と阿慈には、通じる言葉があるようにした。
- 三 阿慈が鶴であることは与平には理解できない。最後は教えられて理解する。

四 阿慈の行為は、報恩のためだけではなく、愛情によるものとした。

五 阿慈は、二度目以降は煩悶の末、機織りを決意するようにした。合計三度織る。

六 最後には、二枚の千羽織りの布を作る。

七 幕切れは、与平が布を抱き締めて阿慈の名前を叫ぶ。

十一 「つう」と「阿慈」

主人公の「つう」の名前を中国語に翻訳するときに、初めの頃の新劇「夕鶴」の中国語訳では「阿通」の文字が当てられていた。

私達は、日本語の仮名を安易に漢字に置き換えた最初の翻訳の語感を嫌い、「阿慈」にした。これは、今回の目玉の工夫であった。

「慈」は中国語の発音が、ほとんど日本語の「つう」に近いもので、意味も「慈悲」という熟語が示すように、「つう」のイメージに通っているのは、むしろ中国人によく理解してもらえた。この文字の発見は私の提案に、北方昆曲劇院の女性座付き作者・張虹君と、康小青とともに苦勞した、辞書と首引きでの産物である。後の中国側の劇評の中で、このネーミングをほめてもらえたが、私は「つう」が中国でも、そのまま「慈」の同音で再現できたことに、今回の中日合作の古典劇の意味が象徴的に現れているような気がする。

十二 中国古典劇の外国演劇との交流

外国公演のために外国の企業からの資金援助を受けて、古典劇が新作を作ることは、近年の北京では日本（坂本竜馬）・ドイツ（夜の鷲）北京の公演が最初にあった）・イタリヤ（トゥランドット）などの国を相手に、専ら京劇の世界で試みられていた。ところが掛けて行った外国公演では、大成功をしたと言いながらも、肝心の北京での凱旋公演がなかったり、中国で特に評判になったとか、その後、再演されたとかいう例が少ない。

上演した劇団の「保留劇目」という、劇団の財産の演目にはなっていないようである。演劇交流としてはこれでは物足りない。

私を手掛けた「曾根崎殉情」の場合も、武漢漢劇院の製作費の援助要求があり、私費で援助をしたが、当時の中国では国や省や市が、資金の保証をしないと、公演準備が出来なかったからであった。近年は中国内外の企業や個人などからの支援で公演が可能になっている。

昆曲「夕鶴」は劇団の自主企画で、所属する北京市文化局の特別資金の支給があり、外部からの援助はなかった。しかし、それでは不足なので、出演者達に資金調達の指令があり、私も一緒になって日本企業などへの資金援助の要請書を作り、働きかけたが、不況の

ときでもあり、全く成功しなかった。北京の初演については、それでも無事に終了出来た。

日本公演は、私が日本に帰国してから運動しようと考えていたから、遠距離目標に過ぎなかった。都民劇場の下見に来たいという要請は、望外の望みの実現を可能にしたという思いがしたが、不慮の出来事がそれを不可能にした。

昆曲『夕鶴』は洪雪飛の逝去という事故のために日本上演はなくなったが、翌年の九月の北京で行われる国際婦人節には、新しい「阿慈」による上演が行われた。中国文化部が選ぶ「文華獎」受賞を目指して、再演を計画していたようだが、これは主演の楊鳳一の家庭の都合（出産計画）で中絶している。しかし、古典劇の昆曲に『夕鶴』がいつまでもその誇るべき財産として残ることで、文化の、演劇の国際交流が果たされることを願っている。

〔参考Ⅰ〕北方昆曲劇院が用意した昆曲『夕鶴』の粗筋（プロゲラムの翻訳）

寒い冬が近付くと、鶴は遙か南の東海を指して飛ぶ。一羽の雌の鶴が矢に当たり落ちてきて、農夫の与平に見いだされる。善良な与平は鶴を家に連れて帰り真心を尽くして介抱するので、傷はすぐに平癒する。鶴は恩に報いるためと、さらに純情な与平を恋慕したた

めに、美女の阿慈と化身して、与平と良縁を結ぶことになり、自らの羽を抜いて与平のために錦の衣を織り上げる。

与平は同郷の老肖・老温に唆されて、金銭の欲のために、錦衣を売り払うばかりか、むさぼる心から、一度二度と阿慈に機織りを迫り、さらに約束を破って阿慈が機織りをしているところを覗き見てしまう。阿慈はなす術も無く、悲しみをこらえて与平と別れ、彼女の求める別の世界を目指して飛んで行く。

〔参考Ⅱ〕昆曲『夕鶴』歌唱の詞章

一 序幕の女性の歌（劇の粗筋を物語るもの）

この世の中の変化には、定めのあるもの
鶴は遙かの南に、暖を求めて飛んで行く
群れをつくって大空を舞い戯れるたけなわに
不幸に一羽の鶴は矢傷を受ける
若い農夫が助けて救う

二人の心は相通じて、縁を結ぶことになる

美しい音楽や歌、妙なる舞・踊りで、悲しみ・喜びを伝える

不思議な島国日本の物語は、今にも伝えられている。

二 阿慈の出の歌

雲の海に紛れれば、清らかな風吹き渡り、
たちまち星の輝き隠れなし。遙かかなたを眺めると、

山の峰の銀色に 輝くのが見えてくる。

あれは蓬萊山ですか。あれは阿里山ですか。

群鶴の答えの歌

ああ、これは富士の山、東海扶桑の国は、美しく、豊かであること。

三 阿慈と与平の結婚式の歌

輝く大空、輝く大空、春の光は、山や野にあまねく降り注ぐ。

みんなが光り輝いているよ。

今日は七夕伝説の鵲の橋が空から降りて来て、

織女が牛飼いに嫁いで行く。これは夢ではありません、

二人の心が溶け合って、いついつまでもいつまでも。

四 幕切れの歌（伴唱・陰の歌声）

純情的阿慈啊！ 你飛向何方？ 飛向何方？（お前はどこへ飛んで行くのか）

〈参考Ⅲ〉昆曲『夕鶴』の製作日程メモ

〈一九九三年〉

八月 洪雪飛との出会い（老舎茶館）

洪雪飛来訪 『夕鶴』の「つう」を演じたいの希望表

明

九月 『夕鶴』上演の可能性の検討、北京での資料収集開始

『夕鶴』研究会開始（洪雪飛・康小青・向井芳樹）

第一脚色構想案作成開始（向井）

木下順二氏に許可願いの手紙を出す

北方昆曲劇院作者・張虹君に会う

第一脚色構想案完成 昆曲側作者に手渡す

昆曲側の要求を入れた脚色の改訂を開始

第二脚色案により 第一昆曲台本（張）完成

二二日 山本安英女史逝去を知る 弔問と二度目の許可願いの手紙を出す

第二台本（張）完成

十一月

十二月

第三台本完成

六日 木下順二氏許可の連絡あり（条件・夏淳の演出）

十日 夏淳に北方昆曲劇院から協力要請（全部の脚色案の検討の後に許可）

二七日 夏淳演出承諾 第四脚色案作成

〈一九九四年〉

一月 第四台本で、配役・作曲などの検討

二月

『夕鶴』研究会参加者増加 マスコミ宣伝用の写真アルバム作成

第五台本で、歌唱部分の作曲依頼

演出計画の相談開始

三月 関係者の顔合わせ 台本の短縮を始める

日本大使館訪問 協力要請

四月 開幕の群鶴の踊りテスト開始 途中で一人の女優の入れ替えあり

副演出の呉継静

南昆より参加

六月 歌唱部の作曲完成 笛の伴奏で歌唱のテスト開始

八月 本読み開始 子役は無しのまま

十月 立ち稽古開始 連日稽古（日曜のみ休日）

舞台美術・照明・衣装・全体の作曲家参加

五月 各場の稽古 一日二場のペース

五日 全体の通し稽古（三日間）子役は鶴の女優が兼ねる

一・二日 衣装・装置のデザイン決定 試作開始

一九日 一週間の休暇 稽古の再開 夏淳演出計画の説明

二十日 北京日報に『夕鶴』紹介記事が出る

六月 連日の稽古 全体の音楽作曲完成

四月 音合わせの稽古 子役選び五人（劇団関係者の子弟）

十日 通し稽古 子役参加（内二人は最終的には排除し、女優が兼ねる）

以後、一カ月余り、中国昆曲青年交流大会のため、休暇

夏淳 人民芸術劇院のシンガポール公演に演出家として

参加

七月 稽古再開 公演日程の決定

二二日 通し稽古 頭髮テスト（阿慈のみ）

二三日 歌唱のみの通し稽古（響排）

二八日 衣装をつけた通し稽古（彩排）

八月 舞台装置・衣装・音楽に合わせた手直し

四日 北方昆曲劇院での通し稽古（彩排）

一二日 北京兒童劇場に大道具搬入

一三日 北京兒童劇場での通し稽古（彩排）

一四日 公演開始（第六上演用台本完成）一六日まで三日間

一五日 北京演劇専門家達の『夕鶴』合評会（北京市文化局主催）

一九日 北方昆曲劇院の内部の反省会

二二日 北方昆曲劇院二度目の反省会（反応の紹介）

二三日 関係者のみの反省会 打ち上げ宴会

九月一三日 洪雪飛 新疆ウイグル地区で自動車事故 逝去 石油

労働者慰問の公演

享年 五二歳

二十日 日本大使館主催 『夕鶴』公演予定 北京兒童劇場

中止

十月 八日 洪雪飛 葬儀 告別式

〈参考Ⅳ〉昆曲「夕鶴」の初演時のスタッフ・キャスト

企画 王蘊明 (北方昆曲劇院院長)

向井芳樹 (日本)

夏淳 (北京人民芸術劇院)

原作 木下順二 (日本)

脚色 向井芳樹 (日本)

張虹君 (北方昆曲劇院)

翻訳 康小青 (中国科学院)

演出 夏淳 (北京人民芸術劇院)

副演出 吳継静 (江蘇省昆曲劇院)

張国泰 (北方昆曲劇院)

作曲 陸放 (北方昆曲劇院)

戴頤生 (北京曲劇団)

舞台 黃清澤 (北京人民芸術劇院)

照明 霍焰 (北京人民芸術劇院)

服装 徐灼 (北方昆曲劇院)

蔣延忠 (北方昆曲劇院)

司笛 王大元 (北方昆曲劇院)

司鼓 李永生 (北方昆曲劇院)

舞台監督 方彤 (北方昆曲劇院)

配役 阿慈(つう) 洪雪飛(青衣・旦)

与平(与ひょう) 楊平友(老生・生)

老肖(惣ど) 周万江(花臉・浄)

老温(運ず) 馬宝旺(文丑・丑)

群鶴 孫雪梅(閨門旦)

董翔燕(武旦)

候爽(閨門旦)

馬雯(武旦)

魏春榮(閨門旦)

王瑾(花旦)

劉巍(老旦)

王瑾(花旦)

楊子龍(子役)

他に二人 董瑤琴(花旦)

歌唱

〈参考Ⅳ〉昆曲「夕鶴」の場割り

序幕Ⅰ 屏風の前

古書籍を持って、旗袍の女性が歌う

笛・箏・二胡・三味線の楽員の舞台上で
の演奏

第四場 郊外
第五場 与平の家

II 天空

六羽の鶴の舞に、鶴の「阿慈」が加わる

III 日本の雪の原野

老肖が矢を射掛ける、阿慈の災難と与平

の救済

第一場 与平の家

子供達と与平の遊び

阿慈の変身 子供との出会い、与平との

出会い

子供達に勧められての二人の婚礼

第二場 雪原・与平の家

老温と老肖の出会い 与平の家を訪問

阿慈と与平 千羽織りの上着を阿慈が贈

る

二人の楽しい雪遊び

老温達の訪問 与平は老温と千羽織りを

売りに行く

第三場 与平の家

与平からの首飾りの贈り物を阿慈が受け

取る

再度、与平による、千羽織り作りの要求

子供達と与平の遊び、与平の変心の子供

達が責める

老温・老肖の相談 老肖の金儲けの企み

二人の幸福な一時 老温達の訪問

金儲けの話に、与平の心が動き、又機織

りを要求する

阿慈の嘆き

最後の千羽織り作りを、阿慈が承諾する

機織り場を老温達が覗く

阿慈が鶴であると言うので、与平も覗く

阿慈を求めて外に探しに行く

老温・老肖・与平が登場

老温が与平に、阿慈が鶴であることを告

げる

阿慈が二枚の千羽織りを持って登場

与平に別れを告げる

阿慈は鶴に戻り、天上に去って行く

与平は千羽織りを持ったまま見送る

鶴の一枚の羽根が、与平の上に落ちてく

る